脱原発 探る地元産業

福島第一原発事故から 4 年半という歳月が流れようとしている。この間、せめて原発への関心だけは持ち続けたつもりだ。原発事故の怖さは、今も避難生活を余儀なくされる福島の人たちのことを考えるだけでも実感できる。2011 年 5 月 21 日に中部電力浜岡原発の「見学」に出かけた。緊張しながら、原発構内などを回ったことが忘れられない。その時から、浜岡原発のことが気になっていた。

表題と写真は朝日新聞 8 月 26 日朝刊である。リードから―静岡県御前崎市の中部電力浜岡原発が全炉停止して 4 年余。国や電力業界が「原発回帰」を進める中、地元では、原発に頼らない産業を模索する動きが広がり始めている。

御前崎グランドホテル。中国人客を乗せるツアーバスが毎朝４～５台並ぶ＝静岡県御前崎市御前崎

浜岡原発から北東へ 3 キロ余り。静岡県牧之原市の太平洋を見下ろす高台に、黒いソーラーパネルが光る。4 月に稼働を始めた大規模太陽光発電所だ。茶畑の間の山林などを切り開いた敷地は 30・8 ヘクタール。パネルはまだ増設中で、来年 3 月には静岡県最大の約 19 メガワット、8800 世帯分の発電を見込む。

静岡は高知や宮崎などと並び、全国有数の年間日射量を誇る。開発した御前崎市の不動産会社、タクミ企画の栗山義久社長は「十分採算がとれる」と話す。2012 年以降、50 カ所の太陽光発電施設を施工した。出力の総計は 33・9 ワットに上る。

同社は大型スーパーや、マンションなどの開発を手がけてきた。しかし、東日本大震災以降、南海トラフ巨大地震の想定震源域にあることや、原発に近いことなどが敬遠されて需要が激減した。栗山さんは「企業の投資が入ってこないし、引っ越してくる人もいない」。だからソーラーに目をつけた。「太陽の光は多い。自然エネルギーのまちとしてやっていくしかない」

経済産業省によると、今年 4 月末時点、静岡県内の太陽光発電施設の総出力は 968 メガワット分。再生可能エネルギーの固定価格買い取り制度が始まった 2012 年 7 月時点と比べ、4 倍になっている。中でもメガソーラーなど住宅以外の導入施設が急増している。

7 月下旬の日曜日の朝。原発から約 10 キロ、太平洋に臨む「御前崎グランドホテル」のロビーは、出発を待つ中国人観光客でごった返していた。震災後、同ホテルの福田昌

朋社長は「この地域に原発は必要ない」と原発反対を表明した。以降、同ホテルの宴会場で毎年 3 回ほど開かれていた、中部電力と関連の下請け企業の約 250 人が参加する懇親会の予約は入らなくなった。福田さんは「御前崎は、もともと観光と漁業のまち。原発事故が生活に与える影響が大きすぎることを知った。再稼働など、経営には余分な外的要因はもうほしくない」と話す。

6 軒の茶加工業者電力つくるしずおか御前崎茶商協同組合は、北海道への販路を新たに開拓した。中山啓司理事長は「もともとお茶離れは深刻。原発事故の風評被害から脱するために新天地を求めた」と話す。

「原発が停止し、地域をどうするかを考えた時、自然を大切にしたいと思った。台風や津波の被害は回復できても放射能は回復できない。地域の特性を生かして、自立しなければ未来はない」。中山さんは、そう考えている。

（2015 年 9 月 10 日）